ジャーナリズム史２００２

Extra Version　**鈴木雄雅**

戦争とジャーナリズム (1)

（１）メディアは総じて「戦争」を批判的に論じるが、始まるとナショナリズムに走るのではないか。
(2)メディアは果たして、戦争を否定的に扱っているだろうか。
（３）「国益」ー「公共の利益」は共存できるのだろうか。

19世紀の戦争とジャーナリズム

１．クリミア戦争（Crimean War 1853-56;英・仏・トルコ対ロシア）
　1854　The Times が W.H.d Russell　世界初の従軍記者
　プレスキャンペーンの成功ーーナイチンゲール派遣
２．台湾征討 1874(M7) 岸田吟香『東京日日』黙許
　ー日本初の従軍記者
　西南戦争 1877 (M10)　各社記者派遣ー戦況報道
３．日清戦争 1894-95(M27-28)
　政府批判の言論を自発的に停止し、「挙国一致」して勝利を目指せと主張。多数の従軍記者を戦地に派遣。号外合戦など、報道競争を展開　※旅順虐殺事件(1894)報道：NYワールド特派員 James Creelman
４．米西戦争　1898　ハースト「戦争は私がつくる」：
　Please remain. You furnish the pictures and I'll furnish the war.
５．日露戦争 1904-05(M37-38)

♦ 非戦論：『万朝報』／開戦消極論：『東京日日』

♦ 日露戦争を画策した男：タイムズ特派員　George Ernest Morrison

♦ Lionel James: タイムズ／ＮＹタイムズの特派員
♦ 外国人特派員の増大: 56人（日清戦争16人）

20世紀の戦争とジャーナリズム(1)

６．第一次世界大戦　1914-1917
宣伝戦が始まる
ノースクリフ＝あばいた「砲弾の悲劇」
第二次世界大戦直前：イギリス新聞界の「宥和政策」同調論
７．日本ーファシズムへの道：15 年戦争

1.新聞の論調《軍縮ムード》
→軍部の既成事実を追認する方向に
昭和 12～13 年頃迄に戦前の頂点:
・紙数、部数、ページ数、広告の掲載量ともに最高
・大陸での武力衝突→ニュース関心強まる。増ページ数。日曜夕刊の復活
2.言論の弾圧の進行過程
①政党政治の崩壊－他勢力（右翼、左翼、軍部）の台頭
②法的拘束、束縛の増加－「言論の自由」－ジャーナリズムの衰退
③治安警察・軍事国防・新聞出版・郵便放送映画公告関係など 30 近い
④中核は内閣情報局－内務省－陸海軍報道部、航空本分、警察庁検閲課
“記事指導”　松浦総三『戦中占領下のマスコミ』
3.世論の支持
4.宣伝戦

宣伝（propaganda）＝社会的評価や事実の有無にかかわらず、宣伝者が主観的に好都合と考えている世論喚起のために、人々の意見・思想・信念・態度・行動・価値観などを一定の方向に組織的・継続的に誘導すること、あるいはそのような試み。cf. 教育、キャンペーン

ジャーナリズムの抵抗

♦ 1931年（昭和６年）9/18　満州事変　ラジオ臨時ニュース：ラジオメディアの威力

①1932年（昭和７年）５・１５事件（犬養首相暗殺、政党政治の終焉）
→菊竹六鼓（淳・すなお）の『福岡日日』
②1933年（昭和８）　関東防空大演習
→桐生悠々『信濃毎日』
③1944年（昭和19）
→新名丈夫『毎日』「竹槍では間に合はぬ」

戦争とジャーナリズム－平和とジャーナリズム (2)

１－ａ．第二次世界大戦

第一次大戦　イギリスの成功→現代型の宣伝始まる
善玉・悪玉への単純化、表現として簡単明瞭なスローガンの繰り返し→受け手の情緒的偏見に訴える
戦闘員のみならず、自国民に対する宣伝が不可欠
［背景］
①マス・メディアの技術発達：プリント（印刷）／コモンキャリア（通信）／ブロード

キャスティング（放送）
②大衆の時代が始まる→大衆感情を抜きにして、社会的・政治的決定が不可能に
↓
マス・メディアが大衆感情を社会的平面に、大量に引き出す力を発揮
《マルクス・レーニン主義における宣伝、煽動》のち、ヒトラーに受け継がれる
組織的な宣伝機構の登場＝大衆の精神統制機関、再教育装置
先進的な少数の人々に対して系統的なマルクス主義の理論を教え、
広範な労働者層には単純な観念を叩き込む
→革命運動への組織化のための武器
→アメリカでのＰＲの発達　社会的正当性の主張手段

１－ｂ．第二次世界大戦

１．情報統制－マス・メディアへの言論統制、ジャーナリズムの自主規制
戦争遂行への協力：
アジア地域での日本語新聞発行
放送局開設：台湾、朝鮮、満州
短波放送による宣伝
日本＝東京ローズ、日の丸アワー
自由フランス放送；ヒトラー／ゲッペルス
ビラ（伝単）
２．原爆報道
原爆報道
冷戦のため－仕方がなかった－「ノーモアヒロシマ」－残虐な日本
モニカ・ブラウ『検閲 1945-1949　禁じられた原爆報道』（時事通信社、1988）
キューバ紛争:1961 年　「国益」の保護－冷戦思考に色濃く染まる

３．ベトナム報道：1964～1975

トンキン湾事件：軍事介入のための捏造
メディア規制のない状況で、特派員員の報じるメッセージに人々は、
戦争の意味に懐疑を唱えた。とくにテレビ・メディアの威力
「茶の間に戦争を持ち込んだ」
ハルバースタム『ベスト・アンド・ブライテスト』
1965　『毎日』『朝日』のベトナム報道が非難され、ＴＶ番組の放映中止
1971　『ＮＹタイムズ』のペンタゴンペーパーズ事件（秘密文書暴露）
1972　『ワシントン・ポスト』のウォーターゲート事件　大統領辞任
B.ｳｯﾄﾞﾜｰﾄﾞ/C. ﾊﾞｰﾝｽﾀｲﾝ　『大統領の陰謀』
1972　沖縄密約漏洩事件『毎日新聞』

20世紀の映像9：アメリカ社会が揺らぎ始めたーベトナムの衝撃

1．1961-63 年　J.F.Kennedy：35 代大統領　Great Debate：Nixon
　63 年ダラスにて暗殺: 真相は？
　ベトナム戦争：冷戦下、社会主義勢力侵攻の脅威、アジアの共産化阻止
　米のサイゴン政権支援
2．公民権運動：南部の黒人問題→全米へ
　M.R.King:非暴力運動　「私には夢がある･･･」
　　We shall overcome･･･
　　Malcom X: 黒人の分離独立を唱導
　「白人の暴力には暴力で対抗」：自衛のため

♦「アメリカのベトナム戦争」か？

1．L.B.Jhonson:　トンキン湾事件(1964 年 8 月)
　北爆（1965 年 2 月)、ベトナム戦争が泥沼化
　南ベトナム民族解放戦線
　沖縄からの B52 出撃、横須賀から軍事補給
若者が社会の動きに反応：世界へ影響
公民権運動を支援：大学、大学生の存在
言論の自由とは：無関心から実行へ

♦ 泥沼のベトナム戦争（～75年）

♦ 戦争報道

・自由な報道：市民へ「戦争」が伝えられた
・映像：カメラ(journalism) はどこにあるか
・北から、アメリカ側から：軍事施設のみの虚構
・べ戦争への懐疑：10/21　国際反戦デー
・徴兵拒否、平和（反戦）運動：「国を愛するとは」
・国家を敵とするとき、国家の敵になるとき、（富んだ）国家が貧しいものを残酷に操る

♦ ジョンソンからR.ニクソン(1968～74)へ

テト攻勢(1968)：米大使館襲撃の映像
※　小田原敏「報道における死体について」『コミュニケーション研究』No.16(1986)
－1968 年：キング牧師、R.ケネディ暗殺
法と秩序の回復、ベトナムからの名誉ある撤退
伝説のウッドストック：ヒッピー若者の新しい価値観

♦ 月面へ：1969年

月面からの生中継：アメリカは世界一の国
ベトナムの数十万より、月の上の 2 人か

100 万人の反戦デモに一般市民が参加

♦ 沈黙の反戦運動(great silent majority)の意味

- 社会の亀裂
- 名誉あるベトナム戦争の終結
- ブルーカラーの「国を愛する」意味
- 「国」「国家」を支える人々とは

♦ 戦争は拡大化

- 「内部からの侵略と戦うべを助ける」という神話、幻想
- アメリカ的価値の勝利：平等を信じ、民主主義を信奉し、共産勢力と戦うべを助ける

♦ 南ベトナム政府の崩壊：1975/4

- 米の南ベトナム政策の失敗

４．ポスト・ベトナム　1975～

①ベトナムの教訓－メディア・コントロール
　政府に都合のいい記事を書かせる。都合の悪い記事をかけない環境に記者を置く（危険という理由で）
②主役が新聞からテレビ（映像）に
　1983　中米グレナダ侵攻
　1986　イラン・コントラ事件（レーガン政権）
　1991　湾岸戦争（ブッシュ政権）
　2001　アフガン戦争
　佐々木伸『ホワイトハウスとメディア』（中公新書 1071)